医者も知らない平穏死

連載⑩

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穏死』10の条件」など。

「脱北」しかない

「病院で死ぬくらいなら、家に帰りたい」という患者さんとご家族の悲痛な願いをかなえる方法は、病院を強制突破することです。「強制突破」という言葉にピンとこない家族には、あえて「脱北」という言葉を使っています。

相談に来られたWさんのお母さん(86)は末期の肺がん。1カ月ほど前から入院しているとのこと。

「担当の先生からは、〈積極的な治療はできない〉と言われました。今は点滴で栄養を取っている状態ですが、その日の体調によっては冗談も言うほど元気。トイレもひとりで行けます。母から、〈家に帰らせて〉と何度も言われたんですけど」

しかし、担当医からは「あかん。お母ちゃんは、もう自分では食べられへん。だから家に連れて帰ったら死にます。Wさん、お母ちゃんを餓死させてもええんか?」と言われたそうです。

(写真はイメージ)

「家に連れて帰ったら、あかんのでしょうか?私は母の好きなようにさせたいんです!」

そうなると、もう「脱北」しかない。在宅医療という世界には、食事ができなくても自然の経過に任せるという道もある――。そんな私の説明を遮るように、Wさんは「分かりました。先生、母をよろしくお願いします!」と言いました。

Wさんの中ではすでに答えが出ていたのでしょう。彼の行動は早かった。担当医と相当モメたと思うのですが、数時間のうちに、お母さんを自宅に連れて帰られました。退院の知らせを聞いたW さん宅へ飛んで向かいました。

初めてお目にかかるお母さんは、小柄でとてもチャーミングな方でした。病院からの車の移動でグッタリされていましたが、同時に慣れ親しんだ場所に戻れて、ホッとしている様子が伝わりました。お母さんは、すでに少し食べていました。

1カ月半後、旅立たれるまで、何度お母さんのダジャレを聞いてWさんのご家族たちと笑ったことか。少し食べたあと、眠るように息を引き取ったお母さんの顔は、とても穏やかなものでした。